「説得」の時代
――明代史から見た福谷彬著『南宋道学の展開』

岩本　真利絵

はじめに

二〇二二年一〇月八日に開催された第七十四回日本中国学会・書評シンポジウム・パネルⅠ「福谷彬著『南宋道学の展開』」において、筆者は評者の一人として登壇した。本稿の一～三の部分は筆者が福谷氏に対して提出した質問（口頭・レジュメ）をまとめたものである。また、本稿の四の部分には筆者の質問に対する福谷氏の回答および会場からの反応、そしてそれを受けて改めて考えたことなどを記した。

一、総評

筆者は明代後期の政治史、具体的には嘉靖帝と管志道の政治に関する思考を研究してきた[一]。つまり、福谷氏の研究内容とは時代も分野も異なる。しかしながら、福谷氏の著書『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、二〇一九。以下、福谷書と略す）は筆者のような門外漢にとっても非常に読みやすかった。その理由としては、思想に関する専門用語や抽象的な議論の説明が行き届いていること、さらに時系列や政治的背景を明確に意識して叙述していることが挙げられる。抽象的な哲学議論よりも具体的な事実の経緯に関心をもちやすい歴史研究者とも対話が可能な著作といえる。

福谷書のなかでもっとも印象に残ったのは、「説得術」という視点である。福谷書によれば、「聖人学んで至るべし」という宋代の議論は、自分だけが聖人になるのではなく、他者に対して理想を提示して自分が望む方向へと他者を誘導するという政治的な意味があり（二一頁）、そこで「他者をどのようにして説得するかという説得術」（三〇頁）に着目したという。筆者は明代の政治史を研究するうえで、今までに上奏や上諭を読んでそれを「説得術」と考える視点を持っていなかったため、この切り口が目から鱗であった。

ただ、同時に「説得術」について、二点疑問に思ったことがある。一つ目は「説得術」という視点の着想の由来である。福谷書を読んだ後に、改めて余英時『朱熹的歴史世界：宋代士大夫政治文化的研究』（生活・読書・新知三聯書店、二〇一一[二]。以下、余英時書と略

す）を読み直したところ、「説服」、つまり説得という言葉が頻出することに気づいた[三]。ここから、「説得」という視点は、余英時氏による啓発もあるのだろうかと考えた。

二つ目は、「説得術」が意味するところである。筆者はなぜ明代政治史を研究するなかで「説得」という視点を持てなかったのか。それは明代政治においては言論によって皇帝あるいは敵対勢力を「説得」することがほとんど不可能であるため、史料を読んでも「説得」という観点は浮かびようがないからである。一方、福谷書には「もっとも陸九淵にとってこの書簡は、単に仏教を批判することだけが目的だったのではない。自分と異なる思想を信じる者に対して、いかに説得すればよいのか、を示すことがこの書簡のもう一つのテーマだったのである」という部分がある（二二〇～二二一頁）。つまり、福谷書では実際に相手を説得できるかどうかは二の次という前提で「説得術」という言葉が用いられていると理解すべきだろう。しかし、説得を主目的としていない言説を「説得術」と呼ぶことは少し引っかかる。福谷書の結論部には、『孟子』から陸九淵・陳亮が「議論法」（三四六頁）や「説得術」、「弁論術」（三四九頁）を学んだとある。相手の「説得」を度外視している言論の名称は「議論法」や「弁論術」の方がふさわしいようにも思える。あえて「説得」としているのは何か理由があるのではないかと考えた。

二、「説得」――朱熹「戊申封事」の「説得術」をめぐって

「説得」の例として、福谷書第六章「消えた「格物致知」の行方――朱熹「戊申封事」と「十六字心法」をめぐって」のなかで取り上げられている「戊申封事」を焦点としたい。「戊申封事」に関する先行研究としては余英時書が挙げられる。同書によれば、「戊申封事」が書かれた淳熙十五年（一一八八）前後は、それまでは高宗から改革志向を抑圧されていた孝宗が、高宗の死によって自身の改革志向を露にし、協力者として道学人士を登用していった時期にあたる。そして、朱熹は数か月前の入対で孝宗の意向を知り、その意向に沿って「戊申封事」を執筆したという（五二五～五二七頁）。余英時氏は「戊申封事」を孝宗晩年の改革に賛同する上奏だととらえているが、福谷氏の「戊申封事」の位置づけ方は少し違うところがあるように思われた。

福谷書によれば、「戊申封事」は、孝宗の「私心」による側近政治を批判し、「私心」を矯正するために「賢臣」を登用する必要がある、そして「賢臣」とは道学一般ではなく閩学の学徒である、という主張が込められているという。また、その時代背景として、孝宗の側近政治と宰相王淮失脚による道学躍進の空気のなかで、朱熹は道学一般ではなく閩学を重用すべきと考えていたことが指摘されている（二七七～二九〇頁）。そして、福谷氏は「戊申封事」について、「あくまで皇帝こそが現実政治の根幹であって、皇帝の政治的主体性を求めているような書きぶりになっている点にこそ、「戊申封事」の巧妙な点があると言える」と評価する（二九二頁）。疑問に思ったのは、「「戊申封事」の巧妙な点」とされている朱熹の「説得術」は本当に巧妙だったのか、つまり当時の時代背景のなかで効果的だったのかということである。たとえば、故意または無意識に「皇帝の政治的

主体性を求めている」と皇帝が誤読する可能性はないのか、また当時において実現可能性はどれくらいで、その後実現したのか否かなどという問題である。たとえば、朱熹は「戊申封事」を通して具体的に誰をどのような官職に登用するべきだと「説得」しているのだろうか。

福谷書によれば皇帝はなるべく「政治的主体性」を発揮するべきでないというのが朱熹の主張である。そうであるとすれば、人事に関しても宰相に「賢臣」を登用して、「賢臣」に人材登用を任せて皇帝はそれに従う形が想定される。しかし、筆者が調べた限り、当時は「賢臣」＝「閩学の学徒」は通常手段で宰相・執政になれるような地位にはまだ就任していない。宰相周必大やその他の道学人士は、道学一般を満遍なく登用する方針であり、「閩学の学徒」のみ重用するようには動いてくれない。ということは、まだ登用されていない「賢臣」を皇帝の一存で登用したり、[四]下位の官僚の登用も宰相任せではなく皇帝が関与して「賢臣」を登用したりすべきなのだろうか。また、そもそも人材登用すなわち「用人」はどの立場の役割かという点について、余英時書には、王淮がかつて「用人をもって己の任と為す」としていたという一節がある（三六一頁）。また、朱熹が執筆した乾道年間の宰相陳俊卿の行状でも「用人をもって己の任と為す」が陳俊卿の業績を表す言葉として使われている。[五]ここから朱熹を含む当時の人々の思考では「用人」は宰相の職責とされていたと思われるが、一方で孝宗は「用人」を重要視し、非常にこだわっていた人物である。[六]朱熹の主張する「賢臣」＝「閩学の学徒」の登用実現には、孝宗が「用人」の主導権を握り、下位の「用人」まで関与することが必要であったのではないか。つまり、朱熹の考えは「用人」の部分では「皇帝の政治的主体性」を許さざるをえない構造になっていたように受け取れる。

そう考えると、「戊申封事」は、当時においてはそのように作用しえないからこその言説、すなわち当時の政局の流れや常識、さらに朱熹の孝宗への評価から、孝宗が皇帝の「政治的主体性」を発揮する方向に誤読しないと確信していたからこその言説なのではないか。そうなると、「戊申封事」は普遍的な政治の理想像を提示した言説と見るより、当時の政治の文脈のなかでは効果的だと朱熹が思っていた一時的な政治言説となろう。そして、一時的な政治言説であるとするなら、論理だけではなく、その具体的な時代背景やそこに込められた具体的な意図、そして実際の効果の解明も重要だと思われる。

三、「聖人可学」――明代の皇帝と「聖人」をめぐって

明代には皇帝も朱子学の価値観を内面化した結果なのか、明朝皇帝が「堯舜授受」を現実に継承したという言説が主張されるようになった。例えば、永楽帝の勅撰書『聖学心法』は、朱熹の『中庸章句』序を盗作・改竄したような部分があり、皇帝は「堯舜禹之授受」に連なり、歴代儒者の学問内容も引き継ぐ「君師」であると主張する。[七]また、嘉靖二十六年（一五四七）の殿試の策題には道統論が出題され、そのなかには洪武帝は「堯舜授受之要」を体現していて、それを永楽帝が継承したと言っている部分がある。[八]そして、この時

の状元の李春芳は、二帝三王の心とは洪武帝・永楽帝の心であり、さらに嘉靖帝の心でもあるという答案を提出した。[九] 聖人でなければ「堯舜授受」に連なることはできないだろう。ならば、永楽帝の『聖学心法』は皇帝が聖人であるという理念を示し、嘉靖年間に至っては歴史として洪武帝・永楽帝は聖人だったと解釈されることになったと言える。

このような言説の起源または形成過程については、李焯然氏や陳時龍氏など明代史側からの道統論に関する議論が提出されている。[十] しかし、明代史研究者は明代から過去にさかのぼって、明代の言説の形成に関係する内容しか考察の対象としない。宋代の視点から見た場合、皇帝が「堯舜授受」に連なるという言説はいつからどのように始まると考えられるのだろうか。

四、当日の議論とその後

上記の筆者からの大量の質問に対し、福谷氏から丁寧な回答を頂戴した。まず、「説得術」という視点については、余英時氏が朱熹・陸九淵など道学人士の政治的連帯を強調したのに対し、福谷氏は連帯時期にむしろ二人が論争していた事実から説得の方法に違いがあったのではないかという着想を導き出したという。また、福谷書における「説得」とは「相手の考えを改めようと、相手に自分の考えを伝えること」を意味し、朱熹にとっては「反論の余地のない形で天下に道理（と自分が考えるもの）を示すことが最も重要で、実際に相手を承服させられるかは、必ずしも最優先ではなかった」という。また、「説得」の対象は皇帝一人や論争のライバル個人ではなく、後世の人々も含まれているという。次に、「戊申封事」で想定された登用すべき人材と官職に関しては、朱熹自身を皇帝または皇太子の侍講に登用すべきと考えていたのではないかという見解が示された。また、「皇帝の政治的主体性」に関して補足があり、朱熹は基本的に皇帝は宰相に政治を任せるべきだと考え、朱熹が提言した「主体性」とは宰相の制御を受け入れることに主体的であれということだという。また、「戊申封事」前後の政界のとらえ方については、福谷氏と余英時氏で大きな違いはないという補足もあった。最後に、「聖人可学」について、南宋の皇帝で「堯舜授受」に連なると自任していた人物はおらず、むしろ唐の太宗以下だと自己認識していたという回答があった。また、福谷氏は配布レジュメで「説得行為のどこに「聖人」性が現れるか」というモデル図を作成し、「理念上の聖王」が「天理の体得者としての道学者」を通して「現実の皇帝」を「教化」するという朱熹の考え方を図示した。

筆者を含めた評者三人と福谷氏の議論が終了した後、来場した中国哲学研究者の先生方からコメント・質問が寄せられた。そのなかで複数の先生方から筆者の発言内容について、「政治の在り方と誰を登用すべきかは別問題で混同すべきではない」、「宋と明の時代の空気は余英時が示したように全く違う」という厳しい指摘をいただいた。筆者が宋代政治史をよく知らないまま政策論にこだわったことや安易に明代の話に言及してしまったことで、宋代の士大夫と明代の士大夫の置かれた環境が全く違うという余英時氏の議論[十一]すら知らないと誤解されたことがショックだった。

だが、本稿を執筆するために改めて自分の発言内容や福谷書の内

容および福谷氏の回答を整理すると、自分の理解が間違っている部分に気づいた。「説得」部分において、筆者はまだ登用されていない「賢臣」を登用するためには「皇帝の政治的主体性」の発揮を避けられない危険性があるのではないかと考えた。しかし、これは廷臣が共同で行う「会推」やくじ引きのような人事こそ公平性を保てるとする明代後期の官僚士大夫的な発想なのだろう。福谷氏が示した朱熹の思考モデルを敷衍させれば、誰が「賢臣」なのかを判断するのは「理念上の聖王」であり、現実世界では「天理の体得者」としての道学者」である。聖王の代言人である「道学者」の建議を受け入れた皇帝による人事には、皇帝個人の「政治的主体性」など介在する余地はなく、歴史研究者が気にする手続き論は関係がない。そのように考えると、朱熹にとっては「戊申封事」はむしろ普遍の理想の提示だったのだろう。ただし、後世から評価すれば普遍の理想にはなりえなかった。聖王の代言人を自任した官僚が皇帝に対して「教化」を行う、このような人物がもし明代に存在したら妄言として免職、あるいは逮捕されて命を落としてもおかしくない。シンポジウムの際は宋代と明代のこの落差にまで思考がたどり着いていなかった。その点で会場の先生方の指摘は妥当であり、指摘をいただいたからこそ気づけたので感謝したい。

また、「聖人可学」に関してはシンポジウム内で時間がなく、質問できなかったことがある。それは南宋の高宗の尊号が「光堯」であったこと、高宗の死後に廟号を定める際に孝宗が「世祖光堯」や「堯宗」とすることを望んでいたことである[十二]。「光堯」や「堯宗」の「堯」は、聖人の名ではなく形容詞の「堯」と考えてよいのだろうか[十三]。この点については、後日改めて福谷氏に教えを乞いたい。

おわりに

書評シンポジウムの準備と議論を通して、朱熹の時代と明代後期の異同に関して、自分が漠然としたイメージしか持てていなかったことを痛感した。南宋政治史や思想史の先行研究を読み直す中で、皇帝が「天理の体得者」に従うという理想を抱いて主張できた朱熹の時代と、「天理の体得者」もそれに従う皇帝の存在も想定できず君臣の相互不信のうえにシステム化した政治を作りあげざるをえなかった明代の明確な差異を体感できたことは、今後の自分の研究に非常に有益だった。学際交流により思考を深める機会をいただけたのは大変な幸運である。シンポジウムの呼びかけをしてくださった福谷彬氏、準備段階から当日に至るまでサポートしてくださった司会の三浦秀一先生、筆者とは別角度からみた福谷書の読み方を提示してくださった陳佑真氏・早川太基氏、また会場・オンラインで議論を見守ってくださった先生方に感謝の意を申し上げたい。

《注》

（一）筆者のこれまでの研究は拙著『明代の専制政治』（京都大学学術出版会、二〇一九）参照。

（二）福谷書では允晨文化により二〇〇三年に刊行された上下二冊本を使用している。本来なら福谷書と同一の版本を使用するべきであるが、允晨文化本を入手できなかったため本稿では手持ちの版本を使用した。

（三）たとえば余英時書二七頁には「他們都企図説服皇帝……以増強論証的説服力。」とある。なお、ここでの「他們」とは朱熹と陸九淵を指す。

（四）皇帝が「賢臣」を登用するためには通常手段では難しいことがある。たとえば、「皇帝の政治的主体性」に固執した明の嘉靖帝は「賢良方正之臣」（『明倫大典』巻首「御製明倫大典序」）である張璁に対して破格の登用を行った。

（五）朱熹『晦庵集』巻九六「少師観文殿大学士致仕魏国公贈太師謚正献陳公行状」。

（六）青木敦「淳熙臧否とその失敗―宋の地方官監察制度に見られる二つの型（一）―」（『東洋文化研究所紀要』一三二、一九九七）参照。また、孝宗には「用人論」という著作もある。

（七）『聖学心法』巻二「君道・学問」。

（八）『世宗実録』巻三二一、嘉靖二十六年三月丙寅条参照。

（九）李春芳『李文定公貽安堂集』巻一「廷試策」。

（十）李焯然「治国之道―明成祖及其「聖学心法」」（『漢学研究』九-一、一九九一）、陳時龍「師道的終結―論羅汝芳対明太祖《六諭》的推崇」（『明史研究論叢』一〇、二〇一一）参照。

（十一）余英時『宋明理学与政治文化』（允晨文化実業股份有限公司、二〇〇四）参照。

（十二）高宗の廟号選定に関しては周必大『思陵録』に詳細が記載されている。

（十三）南宋皇帝が堯舜の系譜に連なり道統の継承を意識していたという見解を主張する宋代史研究者もいる。たとえば、Charles Hartman, *The Making of Song Dynasty History: Sources and Narratives, 960-1279 CE*, Cambridge University Press, 2021, pp.281-282、楊宇勛「宋高宗的政治縁飾：従中興復国到製造堯舜」（『嘉大中文学報』一四、二〇二一）参照。ただし、当時の皇帝が意識した道統と朱子学定着後に明代皇帝が主張した道統では内実が違うことが予想される。